

戦中戦後の台湾の事情と日本人引揚げの記録

青木正勝・大野正夫



語り合う青木(左)と大野(右)

筆者青木は台湾で生まれた引揚者の子で、大野は満洲で生まれた引揚者の子である。1947年4月に、二人は奇しくも小田原市立酒匂小学校に入学して小学校、中学校を卒業し、神奈川県立小田原高校から横浜市立大学へ共に入学した。横浜市立大学は自宅から通えて、当時最も学費が安く12,000円(年間)であった。国立大学も12,000円であったが、16,000円に値上がりしていた。横浜市の東端の金沢八景にキャンパスがある。横須賀に近く、旧海軍の兵舎棟が大学校舎であった。広い練兵場が運動場であった。裏山も大学敷地であり細い路が良く整備されていて、よく山歩きをした。二人は専攻学部は違ったが、青木はバレーボール部、大野は探検部で、時々キャンパス内で会うことがあった。青木は卒業後、キャン株式会社、大野は東京大学大学院に進学後、高知大学に勤務した。青木が中学同窓会の記念誌に台湾時代の生活から、引揚げと小学校での生活を記述していた。高知から発信している「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」のホームページに、台湾からの引揚げなどの情報がないので、久しぶりに、台湾と満洲のことを語り合った。台湾の一般的な資料は大野がまとめた。

日本統治下の台湾



日本統治時代の台湾は、日清戦争の結果、下関条約によって台湾が当時中国大陆を支配していた清朝から日本に割譲された1895年(明治28年)4月17日から、第二次世界大戦が終結して日本の降伏までである。日本統治は、中華民国政府(蒋介石)により台湾省が設置、台湾省行政長官公署によって台湾の管轄権行使が開始される1945年(昭和20年)10月25日まで、50年間あまりである。

日本統治で、鉱山の開発や鉄道の建設、衛生環境の改善や、農林水産業、教育の近代化などで台湾の生活水準は向上し、農工業の生産も増加した。

しかし、1940年以後、太平洋戦争になると台湾で生産された食料物資が内地へ供給されたほか、高雄の飛行基地建設や、徴兵制の導入など、在台日本人と同様に台湾

人も兵士や労働力となった。

満洲国の運営や中国との折衝で、台湾人が登用されるケースは多かった。日本の理蕃政策と称された台湾住民に対する統治政策は、住民の教育水準向上に貢献し、法的には日本人や閩南系・客家系住民とはほぼ同等の権利を認めた。日本の統治により台湾人の教育水準は上昇し、就学率、識字率ともに世界最高水準を達成した。一方で、初等教育においては、日本人の通う小学校と現地人のみが通う公学校とは区別され、教育設備や教員等の面で日本人学校が優遇されていた。

また公的機関や日本人の所有する企業では一定以上の昇進は見込めず、例えば台北市役所では課長以上の台湾人は一人もおらず、係長以下か給仕・小使であった。

平和的な印象の強い日本統治であるが、それは統治後期の話であり、初期には統治に反対する武力蜂起がいくつか発生した。武力蜂起は警察や軍隊により鎮圧され、蜂起に参加した者の多くは逮捕、処刑もされた。このように日本の台湾統治には、「インフラの整備」と「日本人意識の植え付け」という特色を持っていた。

1942年(昭和17年)には、台湾で陸軍特別志願兵制度が始まり、1944年(昭和19年)には徴兵制も実施された。約20万人余りの台湾人と在日日本人(軍属を含む)が日本軍で服務し、約3.3万人が戦死または行方不明となった。先住民からなる高砂義勇隊は南方戦線で大きな活躍を見せた。

日本人で、大学卒業後韓国で教鞭とる歴史者の平井敏晴教授(漢陽女子大学校)は、大日本帝国の植民地だった台湾人と韓国人の対日感情の比較に関する取材に対して、次のように述べている。韓国が日本に反発してしまう理由はいろいろありますが、私がまず思うのは、韓国には王朝があったからです。台湾にはなかった。戦後、大陸から台湾にやって来た中華民国軍(国民党軍・蒋介石軍)の兵士や民間人の格好を見て、台湾の人たちが愕然としたんです。彼等の身なりはひどいし、兵器は旧式で、日本軍の兵器と比べると雲泥の差がありました。台湾の人達の方が、生活水準が上だと感じたのでしょ。日本の台湾統治は黒字で、朝鮮統治は赤字だったんです。日本政府は成功した台湾統治をモデルケースにして、朝鮮統治に臨んだけど、うまくいかなかった。

中華民国総統であった李登輝は、日本統治時代に台湾人が学んで純粹培養されたのは、「勇氣」「誠実」「勤勉」「奉公」「自己犠牲」「責任感」「遵法」「清潔」といった「日本精神」であり、これは戦後に中国大陸から来た中国国民党たちは、自分たちが持ち合わせていない価値観だった。

「日本精神」を台湾人の持ち合わせている気質だと定義して、これらの言葉が台湾人に広まり、台湾に浸透した「日本精神」があったからこそ、台湾は、大陸の中国文化に呑み込まれずに近代社会を確立できたのであり、台湾人の親日の背景にはこうした歴史的経緯があると述べている。

また李登輝は、日台は現在のところ正式な外交関係がないため、経済・文化交流を強化すれば良いという意見が多く、経済・文化交流を促進して、日本人と台湾人の心の絆を深めることは重要である。日本人が中華意識に囚われた大陸から来て在住した台湾人を軽視した場合、日本は地政学的危機に陥ってしまう。まさしく日台は生命(運命)共同体なのであり、このことを日本人は常に意識して欲しいと、語っていた。この言葉は、2024年現在、中国、台湾、日本の関係を考える時の基本を示している。

このように台湾では親日的な雰囲気があることから、日本統治も肯定的に捉えていると日本では思われがちである。しかし国民党や親中国の党は、日本統治は日本による搾取に過ぎなかったと位置付けている。それに比べると民主進歩党は日本統治に対して同情的ではあるが、植民地主義

は現代において認められないとの立場を表明しており、日本統治を評価しつつも、その根底に存在した植民地主義を批判する立場を取っている。

台湾からの引き揚げ



台湾からの日本人の引揚風景

台湾からの引き揚げは、1946年(昭和21年)2月21日から開始された。台湾からの引揚は満州に比べては迅速に進んだ。台湾に残留した日本人のほとんどが、台湾人によって危害を加えられたり、不安にかられたことがなかった。朝鮮や満州と比較して、在台日本人の敗戦認識には違った意識がみられる。多くが都市生活者だった在台日本人は、すでに生活用品の切り売りなどでタケノコ生活に陥っていながらも、住居を追い出されることもなく、敗戦前と同じように、市内も自由に歩き回ることができた。また戦前からの紙幣であった台湾銀行券が、敗戦後も主軸通貨として流通していた。在台日本人は自らを守るための組織をつくらうとしなかった

が、これには敗戦前と変わらず台湾総督府が機能していたことが大きな要因であった。

しかし、20年10月以降、台湾統治の中核は、行政長官公署による大陸系中国人(国民党)に握られ、台湾人の政治参加が限定されていることへの不満、大陸から持ち込まれたインフレーション、大陸系中国人と台湾人との言語や習慣の違いに起因する些細な軋轢の積み重なりなどにより、政府に対する不信感・反感は日増しに高まり、やがてその不満は、日本人に対しても向けられるようになった。反日的言動の増加によって、日本への引き揚げを希望する者が次第に増加してきた。

連合国(GHQ)は、現地に日本軍が残留していることは、治安維持の観点でも好ましくないの
で、米軍の輸送用船舶を提供してでも、出来るだけ早く本国に帰還させようと考え始めた。そこで最初に軍人・軍属と家族を優先的に復員させた。その後1946年2月21日から民間人の帰還を開始した。2月21日以降の帰還事業は、第一次帰還から第三次帰還が多く、以後数次にわたった。台湾からの引き揚げ者は、最終的に軍人軍属15万7,388人、民間人32万2,156人、合計47万9,544人であった。

民間人の第一次帰還は、1946年2月21日から同年4月29日までのわずか2か月の間に行われた。この2か月の間に帰還された台湾在留日本人は28万4,105人とされている。専門技術者、研究者、教師などの居留日本人は、その後の引揚船で帰国した。

台湾各地に住んでいた台湾在留日本人は、基隆、高雄、花蓮港の岸壁にある倉庫群を改修した居住施設で待機し、港に辿りついた人達をそれぞれの港から乗船した。

この期間の帰還事業に投入された船舶のうち83隻が米軍の輸送艦、リバティ型輸送船であった。この他は米軍管理下にあった旧日本軍の輸送船や商船等も引き揚げ輸送に投入された。台湾からの引揚者が上陸した港は、大竹、田辺、鹿兒島、宇品、佐世保に集中している。その他少数ではあるが、名古屋、浦賀、博多にも上陸し、短期間で引揚事業は進んだ。



1936年4月、原住民と家族、正勝は生まれていない。

筆者 青木正勝は、台湾で出生から引揚まで 兄弟 4 人私は台湾の台中の市内で、北東部にある台中公園で遊んだ記憶があるが、写真は持ち帰れなかった。

昭和11年(1936)4月5日と書かれている左の写真は、唯一台湾の生活を撮ったものである。この写真はお祭りを見に行った時に、高砂族の男女の方と一緒に撮った写真かもしれない。女性が舞の道具と思われる物を持っている。この時は、まだ正勝は生まれていなかった。父は貿易関係の会社員だったように思うが定かではない。原住民との交流があったようである。幼児であり、生活

環境はあまり覚えていないが、台湾では、豊かな生活をしていたように思う。

記憶では、近くの公園に日本の戦闘機が 駐機して、置かれているのを記憶している。台中市は台湾のほぼ中央部にあり、首都の 台北市、周辺の町を合併した基隆(キールン)市に次ぐ第三の大都市であった。

台中市は政府直轄都市となっており、現在は約 230 万人の大都会で観光地でもある。街づくりは日本統治時代に行われた。鉄道を中心にした 碁盤の目の広い道路が整備された美しい町であった。



台中駅を中心した市内(1930年)



改修された台中駅(現存している)



台中市の並木道



台中市の中心街のビル街



台中公園



統治時代の建物(現存している)

戦争末期に、サイレンとともに防空壕に入った時に、敵機の機関銃のバリバリという音を聞いておびえた記憶がある。そのために、家族で郊外の山間部に疎開した。疎開した村には、山岳地帯に住む先住民の高砂族、生蕃族、熟蕃族などいくつかの部族が生活をしていましたが、私達が疎開して地域には“生蕃族”(せいばんぞく)がいるので、捕まると首を狩られてしまうと言われたことが、かすかな記憶にある。引き揚げるまで、疎開した家に住んでいた。街から遠い山のなかであったので、疎開のために持ち込んだ食糧が少なくなっていった。お腹がすくと、よく近くの木に熟すバナナやマンゴを取って食べていた。バナナやマンゴは美味しかった。

台湾では台北市の総督府や軍事施設の空襲だけであったと記録されているが、台中市は空襲には会うこともなく、疎開する必要はなかった。台湾からの引揚は、昭和 21 年 2 月から開始された。引揚は台北市に近い基隆(キールン)港から、引揚船に乗り、2~3 日かかって、鹿児島島の港にたどり着いた。引揚者は船底につめこまれた。しかも手に持てる程度の荷物しか持ち帰れない厳しい制限があった。船底は、船酔いの吐いた液の悪臭が漂っていたことを強く記憶に残っている。しかし、私は、幼かったせいか、酔った記憶がない。両親から、「船酔いで大変だったの一言につきる」と聞かされた。父方の里は秦野市三廻郡、母方の里は二宮町であった。身内を頼り、叔父の関本や実兄の二宮に、一時、身を寄せていた。「寂しかったのか、昼寝から目を覚ますと、よく泣く子だった」と、母から、後日言われた。酒匂に居住することにして、両親があちこちを探して酒匂 4 丁目、東海道 1 号線の海側に入ったところに土地が確保できて、父が家を建てる資材を集めてきて、一人で一軒の家を建てて、家族が住んだ。物資が不十分で、窓はガラスが入っているのは、2 枚きりであった。家から 50m も行くと海岸であった。砂浜が広くて、休みの日などは、近所の子供達が集まり、三角ベース野球をしてよく遊んだ。砂浜では海水から塩を作る塩田場があり、夏のまぶしい日差しの中、葦簀(よしず)板が三角形(山型)に組まれて、ポンプで海水が雨のように降りかけられて、濃くなった海水が大きな貯水槽に流れ込むように循環していた。この塩田場は、キティ台風が来た時に流されてしまった。小学校入学引揚げが遅れたこと、居住地が見つからなかったこと、家を建てることなどと、日が過ぎてしまい、入学手続きが遅れて 1 学年遅れで酒匂小学校に入学した。1947 年は海外からの引揚者が多い年で、その子供達は入学や学年が遅れることは珍しいことではなかった。入学したら 2 部制の授業であった。午前から始まる学年と午後から始まる学年があった。教室と教員不足だったのかもしれない。また、5 日制で週 5 日の登校日もあった。しかし、途中から 2 部制も 5 日制も廃止されていった。1 年生は女の先生

であった。2年生は男の先生であったが、あまり、記憶に残っていない。3年生になると、3組で師範学校を出たばかりの女の先生、梶塚カツコ先生が担任になった。3年生の時に4クラス編成になったが、私は3組に残り、6年までずっと3組、4年間すべての授業を梶塚先生に教わった。今から思うと、これも珍しい。なぜ、梶塚先生が3組の担任を続けたかわからない。ほかのクラスは1~2年で担任の先生の交代があった。梶塚先生は、男子も女子も区別なく「~さん」と呼ぶように指導した。今の小学校の子供達は、男子でも女子でも(~君)と呼んでいるのを聞くと、梶塚先生の言われたことが思い出される。授業で思い出されるのは、国語の時間で、「原動力」を使って短文を書きなさいと、皆に言われた。どうしても書けず悩んだ記憶が忘れられない。「できたら、外へ遊びに行ってもよい」と言われたが、最後まで書けず、教室に1人残ってしまった。

体育の時間は楽しかった。身長が大きい方であったせいも、特にドッチボール投げ、走り幅跳び、徒競走では、よくクラス代表で、クラス対抗戦にでて、良い成績をとった。図工は、あまり得意ではなかった。版画の工作の時間で、木の葉を彫る時に、葉を切り落してしまい、先生に怒られてしまった。学芸会には、よく出されたが、本人は嫌で仕方がなかった。つらかった。

引用資料;毎日新聞社. 別冊1億人の昭和史、日本植民地史、3:台湾. 1979、233頁